園長通信～こころ～ №３３

アプローチカリキュラム

2024.5.23

どの家庭にとっても、子どもが小学校に入学することは、一大イベントであろう。子どもも家族も期待と不安が入り混じりながら、そのときを迎えるのではなかろうか。小学校には、公立や私立の保育所やこども園、幼稚園などから子どもたちが入学してくる。所属する集団も活動内容も変わる中で、新しい生活に馴染めるだろうかと心配になるのは当然のことである。

２０１８年３月に、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時に改訂された。保育所保育指針の中で、厚生労働省は、保育所は教育も行うことを明確に示している。

幼稚園は、文部科学省管轄の学校である。幼稚園教諭は、免許をもっており教員である。一方、保育所（園）は、学校ではなく児童福祉施設である。管轄は、こども家庭庁である。保育士は、保護者に代わって子どもの保育をする子育ての専門家である。資格を必要とする。認定こども園も、こども家庭庁の管轄である。認定こども園は、保育教諭であり、両方の資格が必要となる。日本の乳幼児教育界は、世界でもまれな複線型であり複雑である。一筋縄ではいかない事情がある。

各自治体では、小学校でのスタートカリキュラムと合わせて、アプローチカリキュラムを策定し、幼児期から児童期への教育の接続を図っている。アプローチカリキュラムとは、小学校への接続を意識した年長児後半のカリキュラムのことである。

例えば、発表会でどんな発表内容にするかの話合いは、小学校での特別活動や学級活動につながる。お寿司屋さんごっこでのチケットや品物の数を数えたり、比べたりする活動は、算数につながる。また、友達と助け合ったり、友達に親切にする活動は道徳につながる。もちつき会で、わかったこと、感じたこと、新たな発見などを他者に伝えることは国語につながる。

幼稚園での一つ一つの活動には、それぞれ意味がある。一つ一つが、小学校の教育へとつながっている。少子化の影響もあるかもしれないが、幼児教育への関心が高まってきている。それは、なぜだろうか。幼児期が、成長していく人間としての基礎を培う大切な時期だと考えられているからではなかろうか。

また、小１プロブレムという問題も、幼児教育への関心を高める要因となっている。これは、小学校に入学したばかりの児童が、授業中に落ち着きがなく、座っていられなかったり、先生の話を聞いていられなかったりする状態が数か月間続くことを指す。要因としては、幼稚園や保育所と小学校との環境の違いが考えられる。

人生の一大イベントである小学校への入学を考えると、幼保小接続の要であるアプローチカリキュラムは、その存在意義が大きいと言わざるを得ない。